



追悼・岡本行夫氏

## 現場主義を貫いた「熱き外交官」

おかもと ゆきお  
(1945年11月23日～2020年4月24日)  
1968年一橋大学卒業、外務省入省。  
在米大使館参事官、北米局安全保障課長、北米一課長などを歴任し、91年退官。岡本アソシエイツを設立。外交評論家として積極的な言論活動を展開する一方、96～98年橋本内閣で総理大臣補佐官（沖縄担当）、2001～04年小泉内閣で内閣官房参与、総理大臣補佐官（イラク担当）を務めるなど、外務省退官後も歴代政権との関わりが深かった。

### 田中均

日本総研国際戦略研究所理事長

たなか ひとし 一九六九年京都大学卒業、外務省入省。北米局北米二課長、北米局審議官、アジア大洋州局長、外務審議官（政務）などを歴任。著書に「外交の力」など。

新型コロナウイルス感染症で急死した岡本行夫さんは、私にとって外務省の一年先輩であるだけでなく、敬愛する友人であり、自分の生き方を考える際に常に意識してきた大切な人だった。

岡本さんは、官だけでなく民間で外交に大きな足跡を残した先駆者だった。彼は生涯「熱き外交官」だった。ワシントンに勤務し、北米局安保課長や北米一課長を歴任。米

国に幅広い人脈を持ち、米国に信用され続けた、類い稀な外交官だった。日本の安全保障には、日米安保体制を不可欠としつつも、これが沖縄の大きな負担によって成り立っていることに心を痛めた岡本さんは、橋本内閣で沖縄問題を担当する総理補佐官として沖縄へ通いつめ、沖縄支援に奔走した。昨今はほとんど見かけなくなった、裏方に徹し、現場に通い続けた真のプロフェッショナルだった。

私は同じ橋本内閣で、北米局審議官として日米安保・沖縄基地問題を担当し、一九九六年に米国との間で普天間基地の返還合意を作ったが、後に岡本さんから厳しい批判を受けた。なぜ沖縄の声を十分聞かなかったのか、あらかじめ沖縄との移設先合意なくして基地移設は実現できないと。まず米国と合意し、その後沖縄と相談ということではないと何も動かない——私にも言い分はあったが、あれから二五年近くたった今も普天間基地返還が実現していないのは、岡本さんが正しかったことを示しているのだろう。

岡本行夫さんは現場主義を貫いた人だった。外交の現場に出て現場にいる人たちの想いを、何とかかかえたいと真摯に思う人だった。小泉内閣でイラク問題担当総理補佐官として、復興への熱い想いをもってイラクを駆け抜けた。その際に岡本さんを補佐した外務省の奥克彦さんが復興支援の先頭に立ち、井ノ上正盛さんと共にテロの凶弾に倒れた時、人目をはばからず号泣した彼の姿は忘れない。

民間人としての岡本行夫さんの業績を見れば、若くして外務省を退官したのは間違っていないかと、多くの人は考えるだろう。しかし退官を決意した本当の気持ちがあったのか。組織を離れキャリアを捨て、一個人として活動することは簡単ではない。頑迷固陋な官僚主義に満ち満

ちた世界では理想は達成できない、政治の貧困にくさびを打ち込むためには中からよりも外からの方がよい、と思われたのか。彼は日本の歴代内閣に対して、外交のあるべき姿を提言し続けた。同時に、後輩たちを困らせてはいけないという優しい気持ちを持った人でもあった。

一九八〇年代後半、日米摩擦の真つただ中において、岡本さんは北米局安全保障課長、私は経済担当の北米二課長で、二人で日本の主張を全米各地で説いて回ったことがあった。講演を終え、毎晩総領事公邸でお酒を飲みながら総領事ともども議論したのは、もう三〇年以上前のことだ。私は議論に疲れて早々と床についていたが、岡本さんは夜遅くまで総領事とことん議論するのを厭わなかった。

こよなく海を愛するロマンチストだった。毎年の年賀状には、いろいろな海で海中深く潜り、ご自身で撮影された美しい魚の群れの写真が使われていた。近年念願であったクルーザーを購入し、湘南の海を堪能されたと聞く。私も誘われたが、都合がつかず実現できなかったのが心残りだ。

コロナ後の世界は以前と同じ世界ではない。米中の対立は激化していくだろうし、それが故に日本の役割が求められていく。岡本行夫を失ったことが途方もなく大きなロスであったことを、人々は長く感じ続けるだろう。●